



2000 年度学会報告奨励賞

革命前のロシアにおける探偵小説の歴史から

—「ロシアのガボリオ」A. シクリャレフスキーと
20 世紀初頭の「分冊シリーズ探偵小説」—

久野 康彦

1

19 世紀半ばから 20 世紀の十月革命までのロシアでは、歴史小説、犯罪小説、冒険小説、女性小説、オカルト小説など様々なジャンルの大衆小説が大量に書かれ読まれていたが、その実態は、現在、必ずしも十分に知られてはいない。しかし、この時期のロシアの大衆文学は、「分厚い雑誌」を拠点とした知識人の文学とは大きく異なった特徴を持ち非常に興味深い。本稿では、革命前のロシアの大衆小説の実態を明らかにする 1 つの試みとして、「探偵小説」に注目したい。

ロシアに「探偵小説」と呼べるジャンルが誕生したのは 19 世紀の 70 年代といわれる。その成立にはいくつかの歴史的・社会的な背景が考えられる。まず 19 世紀における急速な都市化の進行は、同時に犯罪の増大をももたらした。それに対応すべく、60 年代には、司法と警察制度の改革が進められ、² それと平行して当時の新聞・雑誌にはセンセーショナルな訴訟の報道、改革の是非や法律問題を論じた評論などが多数掲載され、「犯罪」に対する民衆の関心を高めた。そして都市やその下層民を描く手法を開拓した 1840 年代の「生理学的スケッチ」や「犯罪実録」に続き、外国の探偵小説、とりわけドイル以前の最大の探偵小説作家とされるフランスのエミール・ガボリオの作品が 60 年代末からロシアで多数翻訳され、³ ロシアにオリジナルな「探偵小説」が生まれる土壌となった。さらに 60 年代は、様々な点で文学の生産・流通・消費システムの転換期であり、初等教育の普及などによる識字層の増大、「大衆紙」「薄い雑誌」「無料文芸付録」といった新しい読者大衆に向けたメディアの発達が、「探偵小説」を含む大衆小説をロシアに普及させる背景となった。⁴

ロシアの探偵小説の研究者によれば、それまでロシアにおいて犯罪を扱った文学は、「手記 записки」という体裁、すなわち記録性を標榜するのが常だったが、1872 年、単に犯罪について記しただけの записки で

はなく、犯罪の捜査について語る「物語 рассказ」が登場した。Н. アフシャルモフの《Концы в воду》、С. パノーフの《Убийство в деревне Медведице》、そして A. シクリャレフスキーの短編集《Рассказы следователя》である。⁵ 新聞・雑誌類に掲載された作品も含めると対象は膨大なため断定は難しいが、この時期にロシアの探偵小説が誕生したというロシアの研究者の見解にひとまず従うことにする。以後、この種のジャンルの作品はロシアで大量に書かれてゆく。⁶ 本稿では、19 世紀後半のロシアを代表する最大の探偵小説作家、アレクサンドル・シクリャレフスキーと、独特の装丁と体裁を持った 20 世紀初頭の「分冊シリーズ探偵小説」に焦点を絞って、ロシアの探偵小説について具体的に考察してゆきたい。

2

アレクサンドル・シクリャレフスキー (1837-83) は父が教師の家庭に生まれた。学資の欠乏によりギムナジウムを中退した後、警察・裁判所の書記、教師、ジャーナリストとして働き、1867 年、中編《Отпетый》で小説家としてデビューした。初期は下層民の生活を描いた作品が主だったが、1872 年の短編集《Рассказы следователя》で、ロシアにおける「探偵小説」の創始者の一人となり、以後「ロシアのガボリオ」として大きな人気を博し、死ぬまでこのジャンルの代表的な作家として活躍する。⁷

本稿で参照したシクリャレフスキーの作品 (長編 2, 中・短編 25) は、5 つ (ほとんどが初期の作品) を除き、⁸ すべてが犯罪を扱った物語である。その中でも半分近く (12 作品) を、「予審判事」⁹ が語り手となる作品が占める。¹⁰ その多くは《Рассказ судебного следователя》という副題がつき、シクリャレフスキーはこのカテゴリーの作品で名声を得た。残りの 10 作品は予審判事以外の人物 (窃盗事件の被害者、弁護士、貧しい文学者など、または正体不明の語り手や 3 人称の語り) が語り手となる作品で、¹¹ 《Из

уголовной хроники》という副題を持つ場合が多い。どちらのカテゴリーの作品も、同時代のペテルブルク、または地方の主要都市を舞台にして、殺人だけではなく、窃盗や自殺をも含む、広い意味での犯罪を扱い、それを巡る謎を解明してゆくのが基本的な筋である。物語のパターンは、まず冒頭である犯罪の犠牲者が発見され、予審判事が現場に駆けつけ、捜査が始まる。予審判事は現場検証をしたり、物的証拠を手がかりに外で聞き込みをしたりするが、西欧の探偵小説の探偵とは違って、そのような手段では真相を明らかにすることはできない。実のところ、シクリャレフスキーの「探偵小説」で重要なのは、「犯人は誰か」を解明するプロセスよりも、むしろ犯人が罪を犯すに至る過去や心理状態にある。

このような心理分析の対象として、シクリャレフスキーの作品では、犯人はしばしば20才から30才ぐらいの多感な若者と設定され、プロフェッショナルな、または生まれつきの犯罪者はほとんど登場しない。初めは無垢な人間が、出身、生まれ育った環境、貧困、教育、社会的差別、周囲の人々などの影響により、どのようにして道徳的に墮落してゆき、ついには犯罪に手を染めるようになるか、あるいは、そもそも犯罪とは縁の無かった人間が、いかなる内心の情熱や偶然的な諸条件などに突き動かされて罪を犯してゆくか——このような問題意識で彼の作品の多くは書かれている。

この問題意識を具体化する場が、事件の関係者が予審判事に対して語る証言や告白である。シクリャレフスキーの作品では、これが探偵の捜査以上に、物語の中で大きなウェイトを占める。そして興味深いのは、シクリャレフスキーの作品では、証言や告白において、重要な事実をしゃべらないことはあっても明白な嘘をつくことはないという暗黙のルールが存在する点である。それゆえ、犯人の虚偽の証言に対し探偵がアリバイを崩してゆくという、西欧の探偵小説によくある展開は彼の作品には全くない。こうして嘘偽りのない証言や告白が複数語られてゆくうちに、犯罪者あるいは犯罪者と関係の深い人物の「伝記 биография」、すなわち過去の人生が次第に明らかにされ、その「伝記」を手がかりに犯罪の真の動機を探り、真犯人を推測してゆくのがシクリャレフスキーの作品における推理の要素である。

一方、しばしば探偵役として登場する予審判事は、天才的探偵というよりは、通常、職務が要求する限りの観察力と判断力は有する常識的な人物として描かれる。シクリャレフスキーの作品では、この予審判事が心理分析の対象となることも多く、彼らは語り手とし

て自らの物語の中に自己の心理を投影してゆく。予審判事はしばしば犯罪者と同じ若く未熟な存在であり、予審判事という官僚の顔の隙間から過剰に人間としての顔をのぞかせる。時にはそのような人間的感情が予審判事としての立場を完全に逸脱させてしまう場合もある。例えば、短編《В сильном подозрении》の予審判事は、夫殺しの容疑者となっている女性に内心恋心を抱いているため、尋問を全うできない（彼は最後にはこの女性と結婚さえする）。

このように多感な犯人と探偵が交わる結果、シクリャレフスキーの多くの作品では、勧善懲悪的で予定調和的な結末とは異なる結末が、しばしば印象的な形で提示される。例えば、短編《Рассказ судебного следователя》では、鮮やかなどんでん返しラストにある。真犯人の発見に一安心した予審判事が、彼に婦女暴行の濡れ衣を着せ罰を逃れようとする犯人の女性の演技によって逆に苦境に追い込まれるのである。「私は彼女をひたすら絶望の眼差しで見つめ、『お願いだから鍵を渡してください』と囁いた。私は予審判事から哀願者になりつつあった」¹² あるいは長編《Новая метла》の結末は、勧善懲悪の原理に則ったカタルシスを読者に与えない。探偵役のハフスキー公爵は、昔親しかった女性の哀願にもかかわらず、己の職の義務に従ってその夫である殺人者を有罪にし、無罪事件を解決させるが、残ったのは後味の悪さである。「しかし、その後、あの事件のことを思い出すと、ハフスキー公爵は悩み、胸を痛めた。あの事件は、犯罪者が良心の呵責に苦しめられるように、彼を苦しめたのだ」¹³ 結局彼は最後に自殺と思われる形で死を遂げる。

このように、シクリャレフスキーの「探偵小説」には、英米の古典的な探偵小説とは別の創作原理が働いている。すなわち、英米の古典的な探偵小説が、探偵が犯人を追いつめてゆくパズル的な面白さを基礎に組み立てられているとするならば、シクリャレフスキーの「探偵小説」は、そのようなパズル的な探偵小説が切り捨てていった、しかし最も根本的な人間の問題の一つ、「なぜ人は犯罪を行うのか」という問題意識に沿って物語が作られてゆくのである。¹⁴ この問題意識を、数々の作品の中で極めて効果的に追究することができた名人芸こそが、シクリャレフスキーをロシアにおけるこのジャンルの第一人者にしたといえる。

しかし、同時代の知識人たちの多くはこのようなシクリャレフスキーの独自性を認めなかった。例えば、チャーホフは初期の長編《Драма на охоте》(1884-85)で「わが国の気の毒な読者たちは、もうとっくに

ガポリオダのシクリャレフスキーだのに飽き飽きしている」と登場人物に語らせ、¹⁵ エッセイ《Осколки московской жизни》(1884)では、「殺人」「悲劇」などの仰々しいタイトルをつけた同時代の犯罪小説の氾濫を嘆いている。¹⁶ また1881年の『祖国雑記』における匿名の書評では、「思想や傾向」の欠如を非難され、「彼は『興味深い』些事を面白く語りはするが、彼の文学的使命はすべてそれにとどまっている」と冷たく評されている。¹⁷ 一方、シクリャレフスキーに対する大衆の評価を証言する直接の文献は残されていないが、彼の遺作で死後刊行された長編《Новая метла》に付された出版者による序文（追悼的性格を持ち、作家の略歴と業績が記されている）の次の一節は、知識人の否定的評価がすべてではないことを窺わせる。「ロシア文学において、彼は、全く新しい、彼以前には事実上なかった種類の文学——犯罪小説（уголовный роман）や犯罪記事に基づいた物語の創始者であり、今日に至るまで、いわば、わが国における唯一のその代表者であり続けている」。¹⁸ また書誌学者ルバーキンの当時の大衆読者についてのコメントは、おそらくシクリャレフスキーの愛読者に通じるものがあったであろう。「彼らはカタログを長いことかき回し、なるべく恐ろしくて凝ったタイトルの本〈…〉を探す。〈…〉あるページに何か『恐ろしい』事件が書いてあるのに出くわすと、その本を買ってゆくのだ」¹⁹

3

一方、20世紀初頭には、全く違ったタイプの探偵小説——「分冊シリーズ探偵小説」²⁰ がロシアに出現する。これは「作者名も明記されずに出版され、図書館にもない独特の文学」（Г.アブラモヴィチ）²¹であった。主人公として登場するのは、有名な外国の私立探偵たちである。アメリカの有名な探偵社ピンカートン社の創始者をモデルにしたナット・ピンカートン、ダイム・ノヴェルズのヒーロー、ニック・カーター、そしてシャーロック・ホームズが三大ヒーローで、その他、日本人探偵（オカ シマ）、ドイツ人探偵（граф Стагарт）、ロシア人探偵（Путилин）、女性探偵（Этель Кинг）などのシリーズもあった。

体裁はいずれも通常の書籍とは異なり、32ページ、5コペイカ（ナット・ピンカートン）、または48ページ、7コペイカ（ニック・カーター、ホームズ）といった廉価な薄い冊子で、扇情的な表題（『マフィアの復讐』『ホワイトハウスの秘密』『中国の偶像崇拜者

たち』『ポンペイの廃墟の黒ミサ』『ピンカートン、あの世に行く』『猿人間ティボ・ティフ』など）に、物語の一場面を描いたカラーの絵が表紙にあって、大衆の購買意欲をそそった。各シリーズは同一の主人公（探偵）で統一され、各分冊ごとに一話完結の話を収録し、定期的に刊行され（通常毎週）、新聞の売子、キオスク、本屋などで販売されていた。1907年に刊行が始まり、1908年には最高の発行部数に達し、その後部数を落としつつも十月革命前まで発行が続く。²² この種の出版物で最も有名だったのが、ペテルブルクにあったA.H.アレクサンドロフの《Развлечение》社で、²³ 以下、同社が発行したピンカートン、ニック・カーター、ホームズの冒険譚を中心に説明してゆく。

内容の点では、探偵の名前や国籍の違いはあるものの、どのシリーズも超人的な知力と体力の探偵、若くて有能な助手、極悪非道の悪人というパターンは変わらない。ここにはオリジナルの尊重は全くなければ、英米の古典的な探偵小説にある論理的推理の要素も、シクリャレフスキーの作品にあった心理分析的な要素もない。基本的に前面に出てくるのは追跡、格闘といったアクションの要素である。例えば、《Шерлок Холмс. Приключение на севере》の一場面を見てみよう。「フランス人は、間髪を入れず猛獣に飛びかかり、布を巻いた左手で相手の喉をつかむと、獣の心臓にナイフを何度も突き刺した。熊は何回か侯爵の左手を足で叩いたが、厚い布のおかげで骨は傷つかなかった。ほとんど続けざまに、倒れた熊を狙うガリーの2発の銃声が聞こえた。しかし、それだけではなかった。鋭い、空気を引き裂くような音が聞こえたかと思うと、ホームズの正確無比な腕が投げた投げ縄が獣の首の回りをきつく絞めた。熊は何度か痙攣した挙句、ぐったりと体を伸ばした」²⁴

このようにアクションを重視する「分冊シリーズ探偵小説」は、シクリャレフスキーのような19世紀後半のロシアの探偵小説の流れを直接に受け継いだというよりは、文体・語彙が極度に平易であること、表紙にカラーの絵のある冊子という装丁、またその絵が物語の説明になっている点などから、むしろロシアの伝統的な下層階級向けの文学、いわゆる「ルボーク文学 лубочная литература」の流れを汲むものといえるだろう。また「分冊シリーズ探偵小説」の登場に先行する19世紀後半のアメリカでは、「ダイム・ノヴェルズ dime novels」²⁵ という下層階級向けの出版物が大量に流通していた。探偵の活躍を大きく取り上げた内容、表紙に物語の一場面を描いた体裁など、「ダイム・ノヴェルズ」は、ロシアにおける「分冊シリーズ探偵小

説」の誕生に大きな影響を与えたと考えられる。だが、物語の中でアメリカの風俗や事情が説明される場合がある点や、ロシアに当てはまるような事情をアメリカに当てはめている点（例えば、アメリカを舞台にしているのに、社会の治安を脅かす犯罪者としてロシア風のアナーキストやニヒリストが登場する）などを考えると、ロシアの「分冊シリーズ探偵小説」は基本的にはロシア人が書いたオリジナル、または相当改変された翻案と考えるべきであろう。

このように「分冊シリーズ探偵小説」は、伝統的なルポーク文学を継承し、ダイム・ノヴェルズの影響を受けて成立したといえるが、その独自の特徴を挙げれば、次のようになる。

ダイム・ノヴェルズでは西部の英雄バッファロー・ビルや探偵ニック・カーターといった国民的ヒーロー、すなわち国民的なアイデンティティの象徴の創造が重要な目標となっているのに対し、ロシアの「分冊シリーズ探偵小説」では、そうした愛国的志向とは正反対の外国人私立探偵の冒険が優位を占めている。彼らはアメリカ、イギリス、フランス、イタリア、ロシア、ハンガリー、アルジェリアなどを股に掛け、日本人男爵、中国人の秘密結社、サハラ砂漠のベドウィン、黒人奴隸、イタリアのマフィア、ロシアのアナーキストやニヒリストといった国際色豊かな悪役たちを追跡し、彼らと格闘する。そこに見られるのはロシア文学の伝統にはほとんどない俗悪なまでに強烈なエキゾチズムであり、この点はロシアのフォークロアや歴史を題材に好んで使い、あるいは題材は外国起源（例えば騎士物語）でもしばしばロシア化してしまうロシアの伝統的なルポーク文学とも違っている。²⁶

また従来のルポーク文学との相違は科学の驚異への関心という点にも見られる。ロシア版ホームズは飛行船に掴まって犯罪者たちを追跡し（《Шерлок Хормс. Тибо-Тиб, человек обезьяна》）、ニック・カーターはレコードに録音された証言に耳を傾けて悪人たちを捕まえる（《Ник Картер. Американский Шерлок Хормс. Фонограф-свидетель》）。その他、電話、自動車、電気椅子、催眠術などの当時のテクノロジーの産物が小道具や舞台背景として用いられていることも多い。この点、「分冊シリーズ探偵小説」は、科学の世紀に生きる大衆の関心を反映しているといえるだろう。

このような「分冊シリーズ探偵小説」を、当時のロシアの知識人たちの多くは「俗悪なもの」として軽蔑し、多くの教師や親たちは学校や家でこの種の出版物を読むのを禁止した。

ローザノフ、マリエッタ・シャギニャン、レフ・ル

ンツなどの言及も興味深い²⁷、知識人の中でも正面から「分冊シリーズ探偵小説」を取り上げ論じたおそらく最も注目すべき例がチュコフスキーの評論《Наг Пинкертон и современная литература》（1908）²⁸である。ここで彼が「分冊シリーズ探偵小説」を「都市の叙事詩」と表現しつつ、評論の前半を映画論に費やしているのは、ほぼ同時期に登場したこの2つのメディアの類似性が窺えて面白い（1908年にロシア初の劇映画『ステンカ・ラージン』が制作・発表されている）。すなわち、「分冊シリーズ探偵小説」は、映画と並んで新しい時代の新しい都市文化を体現したものである。

概して「分冊シリーズ探偵小説」は、教訓性やメッセージ志向の強かった革命前のロシア文学の中では、後のアメリカのハリウッド映画を思わせる徹底した娯楽性を最も強く打ち出したものであり、当時の大衆読者の目には極めて新鮮に映ったに違いない。実際、彼らは「分冊シリーズ探偵小説」に熱中した。『『探偵』小説が、それ以外の全ての種類のありふれたルポーク文学を圧倒してからもう1年以上経つ。それは、通りや新聞のキオスクで、路面電車や鉄道の車内で、控え室や台所で、勉学にいそむ息子や娘の部屋で、授業中の学校の教室の机の下で、学生の手の中で、時として、大人のビジネスマンの手の中で、一番の愛読書の位置を占めている。至るところ、この探偵小説ばかり目につく』（H. ウェリギン）²⁹

4

こうして革命前のロシアでは、一方ではイギリス・アメリカ・フランスなどの探偵小説の影響を受けながら、しかし、他方では独自の流れを形成しつつ、「探偵小説」が発展した。この流れは十月革命後も形を変えてしばらく存続した。その1つが、革命後の1920年代にニコライ・ブハーリンが提唱した「赤いピンカートン Красный Пинкертон」という運動である。これは、ブルジョワ探偵を、悪の資本家と戦う勇敢で利口な労働者たちに置き換えた「探偵小説」で、シャギニャン、カターエフ、エレンブルグなどがこの種の作品を書いた。しかし、シャギニャンの《Меце-Менд》（1923-25）以外はあまり成功を収めず、ネップ期の終わりとともに消えてゆく。³⁰ また十月革命後ロシアから亡命した作家たちの中には大衆小説作家たちも数多く混じっており、³¹ 純粋な娯楽小説が書きにくくなった本国に対し、革命前の娯楽小説の伝統の一部を受け継いだのは亡命文学といえるかもしれない。

しかし、必然的に読者が限定される亡命文学という舞台では、もはや大衆小説は昔日の勢いを取り戻すことは不可能であった。こうして探偵小説の伝統はソ連時代に一旦途絶え、その復活は第二次世界大戦後を待つことになるのである。

(きゅうの やすひこ・放送大学)

参考文献

- А. А. Шкляревский の著作
 Доля (сказка-быль). СПб., 1870.
 Соч. А. Шкляревского. Повести и рассказы. М., 1871.
 Соч. А. Шкляревского. Рассказы следователя. Т. 1. СПб., 1872.
 Уголки трущобного мира (сцены петербургской жизни). СПб., 1875.
 Утро после бала. М., 1877.
 Убийство без следов. Рассказ из уголовной хроники. СПб., 1878.
 Исповедь ссыльного. 2-е изд. СПб., 1879.
 Новые рассказы. М., 1880.
 Две преступницы. М., 1880.
 Самоубийцы-принциписты. М., 1880.
 Собр. соч. А. А. Шкляревского. СПб., 1881.
 Князь Амалат-Бек. Роман из уголовной хроники. СПб., 1882.
 Новая метла. Уголовный роман. СПб., 1886.
 Рассказы из уголовной хроники. 2-е изд. СПб., 1903.
 Что побудило к убийству? М., 1993.
 「分冊シリーズ探偵小説」
 Нат Пинкертон. Король сыщиков. (Бич Редстона; Велосипедист-привидение; В последний момент; Глухонемой; Гнездо преступников под водой; Заговор негров; Заговор преступников; Злой дух Фловерголла; Канатоходец-преступник; Мертвец в Бронкском парке; Отравленные стрелы; Привидение на ферме Рэдэрзон; Путешествие Пинкертона на тот свет; Среди льдов; Самоубийство банкира; Смерть в казармах; Страшный шкаф; Таинственный жилец)
 Ник Картер. Американский Шерлок Холмс. (Борьба за трон; Мечь Мафии; Фонограф-свидетель; Башня голода; Тайна белого дома; Юридическая загадка; Курильня опиума Линг-Джи)
 Шерлок Холмс. (Блуждающие огни «Красного болота»; Жоли, полицейская собака; Китайские идолопоклонники; Приключение на севере; Тибо-Тиб, человек обезьяна; Трагедия в пустыне; Союз анархистов; Черная месса в развалинах Помпея)
 (以上《Развлечение》社刊。発行年の記載なし)
 Сенсационные новые приключения Шерлока Холмса. Тайфун. (《Оживление》社刊。発行年の記載なし)
 Добрый Р. Гений русского сыска И. Д. Путилин: Рассказы о его похождениях. Кн. 1-2. М., 1990.
 Нат Пинкертон. Король сыщиков. Рассказы. М., 1994.

Нат Пинкертон. Король сыщиков. Гнездо преступников под небесами (Репритное воспроизведение издания 1916 г.).

注

- 1 筆者の旧稿(久野康彦「ロシアのホームズたち(革命前のロシアの探偵小説について)——アレクサンドル・シクリャレフスキーとその他の作家たち」、『SLAVISTIKA』13(1998):16-49)も参照。これは当時日本で手に入れることのできた文献のみに基づいて書かれたが、その後ロシアで資料を収集する機会があり、本稿はその成果をもとに書かれた。
- 2 См. *Abbott, Robert*. Crime, Police and Society in St. Petersburg 1866-1878 // *Historian*. 1977. November. № 40. P. 70-84; *Atwell, Jr., John W.* Judicial Reform of 1864 // *The Modern Encyclopedia of Russian and Soviet History* / Ed. Joseph L. Wiczyński. Gulf Breeze: Academic International, 1980. Vol. 15. P. 146-150; *Weissman, Neil B.* Police Reform in Tsarist Russia // *The Modern Encyclopedia of Russian and Soviet History*. 1982. Vol. 28. P. 189-195.
- 3 この時期のロシアにおける外国の探偵小説の翻訳については、*Рейтблат А.* Детективная литература и русский читатель (вторая половина XIX-начало XX вв.) // *Книжное дело в России во второй половине XIX-XX века. Сборник научных трудов*. СПб., 1994. Вып. 7. С. 126; *Чехов А. П.* Полн. собр. соч. и писем: В 30-ти т. Соч. М., 1975. Т. 3. С. 592 を参照。
- 4 См. *Brooks, Jeffrey*. When Russia Learned to Read: Literacy and Popular Literature, 1861-1917. Princeton UP, 1985; *Рейтблат А.* От Бовы к Бальмонту. Очерки по истории чтения в России во второй половине XIX века. М., 1991.
- 5 *Рейтблат А.* Уголовный роман: между преступлением и наказанием // *Русский уголовный роман*. М., 1992. С. 5-6.
- 6 革命前のロシアの探偵小説では、概して論理的な推理という要素がほとんど重視されていなかったことには注意する必要がある。レイトブラートは、「犯罪だけではなく、その解明も扱い、さらに捜査の過程が、たとえそれが物語の中心でないにしても、作品の中で重要な役割を持つ文学ジャンル」とかなり広い意味で детектив を定義しており、当論文でも「探偵小説」という用語に関しては彼の定義を踏襲している(*Рейтблат А.* Материалы к библиографии русского дореволюционного детектива // *de visu*. историко-литературный и библиографический журнал. 1994. 3/4 (15). С. 77)。また上記文献には、革命前のロシアの探偵小説の暫定的なリストが掲載されている(С.78-81)。
- 7 シクリャレフスキーの詳しい経歴については、*Шкляревский А. А.* Новая метла. Уголовный роман. СПб., 1886. С. I-V; *Энциклопедический словарь* (Брокгауз-Ефрон). СПб., 1903. Т. 78. С. 623-624; *Русский биографический словарь*. СПб., 1911. Т. 23. С.

- 328-329 (Reprint: New York, 1962); *Рейтблат А.* «Русский Габорио» или ученик Достоевского? // Шкляревский А. А. Что побудило к убийству? М., 1993. С. 5-13; *Рейтблат А.* Шкляревский А. А. // Русские писатели. XIX век. Библиографический словарь: В 2-х ч. / Под ред. П. А. Николаева. 2-е изд. М., 1996. Ч. 2. С. 423-425 を参照。
- ⁸ «Варинька и ее среда», «В чаду эмансипации», «Доля», «Непрошлое», «Отпетый» の 5 篇。
- ⁹ “予審判事 судебный следователь” とは, 1860 年に従来の問題の多い警察に代わり犯罪捜査を担当する存在として新設された官職で, ロシアの初期の「探偵小説」では, しばしば探偵役として登場する。
- ¹⁰ «В сильном подозрении», «Женский труд» (др. название: «Вера Исталина»), «Исповедь ссыльного», «Как люди погибают?», «Недедовские», «Нераскрытое преступление», «Рассказ судебного следователя» (др. название: «Сестра»), «Роковая судьба», «Убийство мирового судьи», «Секретное следствие», «Что побудило к убийству?» の 12 篇。
- ¹¹ «История Z-ского пожара», «Как он принудил себя убить ее?», «Князь Амалат-Бек», «Неправильный вердикт присяжных», «Новая метла», «Русский Тичборн», «Убийство без следов», «Уголки трущобного мира», «Утро после бала», «Шевельнулось теплое чувство» の 10 篇。
- ¹² *Шкляревский А. А.* Что побудило к убийству? С. 131.
- ¹³ *Шкляревский А. А.* Новая метла. С. 301.
- ¹⁴ 初期のロシアの探偵小説に強い影響を与えたフランスの探偵小説にも, このような犯罪者の心理や過去に対する関心は強くあった (その伝統は後のジョルジュ・シムノンなどにも引き継がれている)。しかし一方では, フランスの探偵小説はロマン・フィユトンとかかわりが深く, 追跡, 変装, 脱獄などを盛り込んだ波瀾万丈のプロットと情緒的な語り口を特徴としていた。ロシアの探偵小説はこのような活劇的要素はほとんど受け継いでいない。19 世紀後半のロシアの探偵小説の独自性は, 犯罪心理に対する関心を極度に誇大化させて物語を作ってゆくところにあると筆者は考えている (ドストエフスキーの『罪と罰』(1866) は, 西欧の探偵小説の観点から見ると異質であり, また探偵小説の枠には収まらない複雑な作品だが, 犯罪者の心理への注目という点ではロシアの探偵小説の先駆的作品でもあり, 実際ドストエフスキーはシクリャレフスキーなど後の探偵小説作家たちに大きな刺激を与えた)。См.: 松村喜雄『怪盗対名探偵。フランス・ミステリーの歴史』, 双葉文庫, 2000; Литературное наследство. М., 1973. Т. 86. С. 429; *Рейтблат А.* «Русский Габорио» или ученик Достоевского? С. 12.
- ¹⁵ *Чехов А. П.* Драма на охоте // Чехов А. П. Полн. собр. соч. и писем: В 30-ти т. Соч. Т. 3. С. 244.
- ¹⁶ *Чехов А. П.* Осколки московской жизни (24 ноября 1884 г.) // Чехов А. П. Полн. собр. соч. и писем в 30-ти томах. Соч. М., 1975. Т. 16. С. 131-132.
- ¹⁷ Отечественные записки. 1881. № 1. Отд. 2. С. 83-84.
- ¹⁸ *Шкляревский А. А.* Новая метла. С. II.
- ¹⁹ *Рейтблат А.* Детективная литература и русский читатель. С. 130-131 より。
- ²⁰ この種の出版物は当時《выпуски》と呼ばれていた (См. *Борисов Л. И.* Родители, наставники, поэты... // Книга и читатель 1900-1917. Воспоминания и дневники современников. М., 1999. С. 135)。
- ²¹ *Абрамович Г. В.* Библиотека — для чтения! // Книга и читатель 1900-1917. С. 141.
- ²² *Brooks, Jeffrey.* When Russia Learned to Read. P. 366-367.
- ²³ См. *Калецкий П.* Пинкертоновщина // Литературная энциклопедия / Гл. ред. А. В. Луначарский. М., 1934. Т. 8. С. 645-649.
- ²⁴ Шерлок Холмс. Приключение на севере. С. 20.
- ²⁵ 1860~1915 年の間にアメリカで発行された大衆向けの廉価な出版物。См. *Encyclopedia of Mystery and Detection / Ed. Chris Steinbrunner and Otto Penzler (editors-in-chief).* London: Routledge & Kegan Paul, 1976. P. 125-126; *Reynolds, Quentin.* The Fiction Factory: From Pulp Row to Quality Street. New York: Random House, 1955; 小鷹信光『アメリカン・ヒーロー伝説』, ちくま文庫, 2000.
- ²⁶ ロシアの伝統的なルポーク文学については, *Brooks, Jeffrey.* When Russia Learned to Read. P. 59-108 を参照。
- ²⁷ *Розанов В. В.* О себе и жизни своей. М., 1990. С. 274, 381-383; *Шагиня М. С.* Человек и время. М., 1980. С. 405-406; *Луниц Л.* На запад! // Луниц Л. Вне закона. Пьесы. Рассказы. Статьи. СПб., 1994. С. 205-214.
- ²⁸ *Чуковский К.* Нат Пинкертон и современная литература. Изд. 2-е, допол. и исправ. М., 1910 による。
- ²⁹ *Рейтблат А.* Детективная литература и русский читатель. С. 135 より。その他, 「分冊シリーズ探偵小説」に対する一般読者の反応については, *Книга и читатель 1900-1917.* С. 57, 135-137, 141-141; *Кошко А. Ф.* Очерки уголовного мира царской России. Воспоминания бывшего начальника Московской сыскальной полиции и заведующего всем уголовным розыском Империи. М., 1992. Т. I. С. 54-60 を参照。
- ³⁰ Красный Пинкертонについては, *Калецкий П.* Пинкертоновщина. С. 648; *Terras, Victor.* Detective Story // *Handbook of Russian Literature / Ed. V. Terras.* New Haven: Yale UP, 1985. P. 100; *Stites, Richard.* Russian Popular Culture. Entertainment and Society since 1900. Cambridge UP, 1992. P. 42-43 を参照。
- ³¹ 例えば, 犯罪小説 (уголовный роман) に手を染めた作家としては, イタリアに亡命した А. Амфитеатров (1862-1938), ベルリンに亡命した Н. Н. Брешко-Брешковский (1874-1943), リガに亡命した Л. Кормчий (1876-?) などを挙げるができる。

Ясухико КЮНО

Из истории детективной литературы в дореволюционной России

(«Русский Габорио» А. Шкляревский и «брошюры о сыщиках» начала XX века)

Во второй половине XIX—начале XX века в России широкой популярностью среди читающей публики пользовалась массовая беллетристика (исторические, уголовные, авантюрно-приключенческие романы и др.), хотя сегодня многие из ее авторов почти забыты. В нашей статье мы анализируем проблемы детективной литературы в дореволюционной России.

Детективы, которые рассказывают не только о преступлении, но и о процессе розыска, появляются впервые в России в 1872 году — их первыми авторами были Н. Ахшарумов, С. Панов, А. Шкляревский. Вскоре произведения этого жанра становятся очень популярными в русской массовой литературе.

Самым известным автором детективной прозы в России во второй половине XIX века был писатель Александр Шкляревский (1837–1883). В отличие от классических произведений английской и американской литературы, в которых основой интриги является логический анализ, в произведениях Шкляревского уделяется большее внимание биографии и психологии преступника (часто и психологии самого следователя-рассказчика). Тем самым он стремится ответить на вечный вопрос: почему человек совершает преступление? Литературная элита, как правило, относилась к его произведениям холодно, но у массового читателя он пользовался славой «Русского Габорио».

В начале XX века в России появился новый тип детектива — «брошюры о сыщиках». Герои этих брошюр — такие известные иностранные сыщики, как Нат Пинкертон, Ник Картер, Шерлок Холмс и др. На эти произведения большое влияние оказали русская традиционная литература для простого народа — «лубочная литература» — и американская массовая беллетристика «dime novels», однако русские брошюры о сыщиках отличаются и от первой, и от второй динамичным повествованием (обилие сцен с преследованием, дракой и др.), яркой экзотикой и большим интересом к новинкам техники. По нашему мнению, брошюры о сыщиках, подобно кино, которое почти одновременно появилось в России, отражали новые тенденции в городской культуре России. Критики и педагоги часто упрекали авторов этих брошюр в пошлости, но массовый читатель, чаще всего школьники, увлекались ими. Брошюрная литература достигла расцвета в 1908 году, а затем ее популярность постепенно упала, хотя публикации продолжались до 1917 года.

После Октябрьской революции, в 1920-х годах, традицию дореволюционного детектива продолжал «Красный Пинкертон» (названный так Н. Бухариным), под лозунгом которого советские писатели пытались писать детективы, в которых буржуазного сыщика заменили смелые и умные рабочие. Но этот детектив не завоевал значительной популярности, и по окончании НЭПа скоро исчез. Жанр детектива существовал и в литературе эмигрантов. Но трудная ситуация эмигрантов помешала успешному развитию детектива за рубежом, и русские писатели почти перестали писать детективы, пока не наступило возрождение этого жанра после второй мировой войны.